

墓山古墳出土の盾形埴輪

- 免山篤コレクション -

竹原 千佳誉

1. はじめに

茨木市の郷土史研究家、免山篤氏の寄贈資料のなかに、大阪羽曳野市に所在する墓山古墳において採集された形象埴輪が含まれている。おもに形象埴輪であり、家形埴輪、蓋形埴輪、盾形埴輪、鞍形埴輪、草摺形埴輪、不明形象埴輪を確認した。なお、これらの採集品は『大阪府の埴輪』で紹介されているものである（野上 1982）。

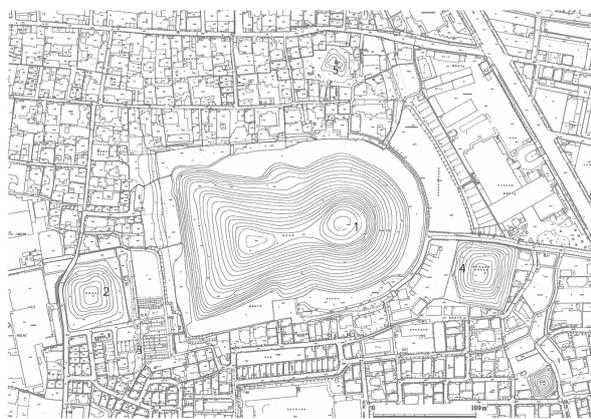
墓山古墳の埴輪は、5世紀代の大王墓に樹立された埴輪を検討するうえで大変重要であるため、本稿では、前稿に引き続き盾形埴輪について紹介することとする。

2. 墓山古墳について

墓山古墳は、古市古墳群、羽曳野市白鳥3丁目に所在する全長 225m、3段築成の大型前方後円墳である。両くびれ部には造出しをもち、墳丘周囲に、濠と堤をもつ。

周辺には向墓山古墳（方墳・68 m）、西墓山古墳（方墳・20m）、野中古墳（方墳・37m）、浄元寺山古墳（方墳・67m）の陪塚が築造されている。

墓山古墳の副葬品は不明だが、滑石製勾玉や、外堤の円筒埴輪が、野焼き焼成と穴窯焼成が混在しているため、川西円筒埴輪Ⅳ期、円筒埴輪共通編年Ⅲ-2と推定される。



1 墓山古墳 2 浄元寺山古墳 3 西墓山古墳 4 向墓山古墳 5 野中古墳

図1 墓山古墳位置図

3. 盾形埴輪

(1) 盾形埴輪について

盾形埴輪は、4世紀中ごろから古墳に樹立される武具の盾をかたどった埴輪である。盾は木製盾と革製盾の2種類をモデルとして制作されたと考えられる。円筒部と盾面からなる構造で、盾面の文様構成や断面形から分類される（小栗 1994、櫻井 1991、田中 1994、高橋 1988、東方 2003）。

盾面は、外区と内区を段差や綾杉文、沈線、梯子文によって分割され、これらの分割方法から「目字」と「日字」、「Ⅱ字」の3つに分けることができる。

高橋氏（1988）や櫻井氏（1991）は区画分割とともに、モデルとなった盾の種類も視野に入れ、「目字」と「日字」に分割するものを木製盾で1類とし、「Ⅱ字」に分割するものを革製盾で2類とする。一方東方氏は、明確な差異となるのは盾面の表現であることから、それぞれA類、B類、C類と分類している（東方 2003）。筆者も、分類視点においては、それぞれの盾面文様を分類している。本稿ではそれぞれの盾面分類をA、B、Cと分類する（註1）。

盾形埴輪の文様は、その盾形埴輪がどの実物盾を参考にして写し取ったものであるのかを検討するのに重要な要素である。

また、埴輪の制作技法からの分類視点も重要である。田中氏は、盾面と円筒部の接合方法に着目し、A・B・C・D類に分類している。A類は盾面と円筒部を別でつくり、貼りあわせる。B・C・D類は円筒部のカーブを利用し、盾の側縁部を貼りつける技法で、A類が古いとされる（田中 1994）。

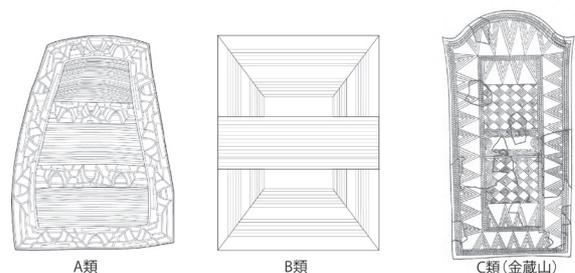


図2 盾面の分類

この視点は、埴輪の時期差を判断する手段となるため、その違いについても検討をしたい。

(2) 墓山古墳の盾形埴輪

盾形埴輪 (図3-1、2、写真2~6)

盾形埴輪は破片を含め6点確認された(註2)。残存が良好なもの2点を図化している(註3)。

1は盾面の角にあたる。破片の残存は高さ12.9cm、幅12.2cm、器厚1.2~2.2cmで、焼成は良好である。盾の側縁と円頭部の間に、補強のためのくさび状の粘土をつめる。くさび状の粘土

には、ハケによる接合痕が残る。円筒部と盾面は別造りである。盾面の文様構成は梯子状文、綾杉文、鋸歯文で構成されている。

2は盾面と円筒部が残る資料である。破片の残存は高さ23.8cm、幅19.7cm、器厚1.1~2cmで、焼成は良好である。盾面と円筒部を支える、2本支持部が残存する。支持部は盾の側縁端部までのびる。円筒のカーブを利用し、盾の側縁を貼り付ける。

盾面の文様は、綾杉文と沈線、鋸歯文で構成される。1と比べて線刻はやや粗雑である。

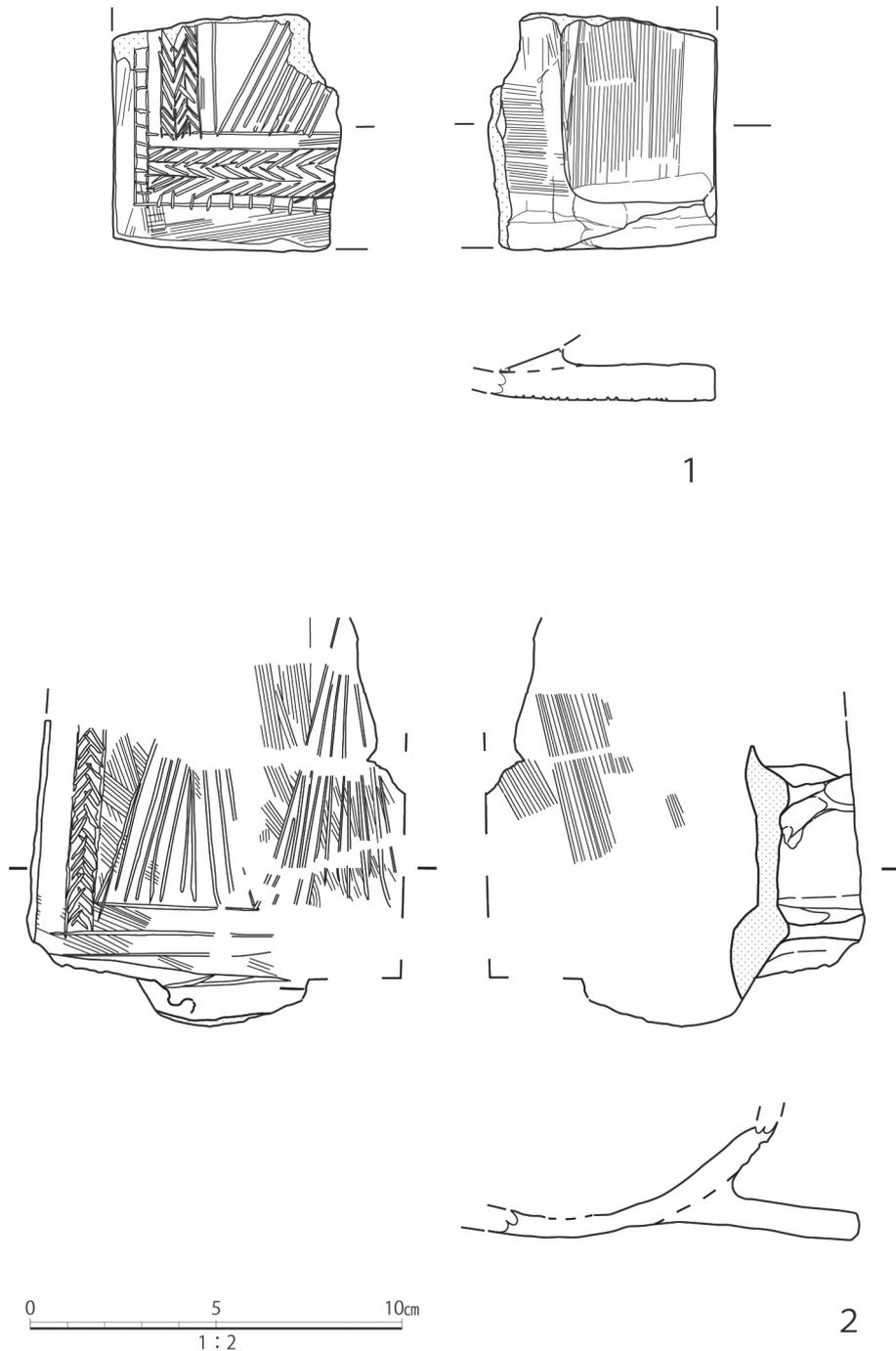


図3 盾形埴輪実測図

(3) 盾形埴輪の比較検討

では、2つの盾形埴輪を比較してみよう。盾形埴輪1は精巧な線刻が刻まれている。文様の構成から、外区、内区ともに鋸歯文を施す。境界線には梯子状文と綾杉文が施されていることから、革製盾をモデルとしたC類に分類できる。盾形埴輪2も同様で、梯子状文はないが、綾杉文の表現があり、革製盾をモデルとしたC類である。墓山古墳出土の盾形埴輪は、2点ともに革盾をモデルとしたC類に分類されよう。ただし、文様においては、境界線だけでなく、鋸歯文の種類も異なる(図4)。

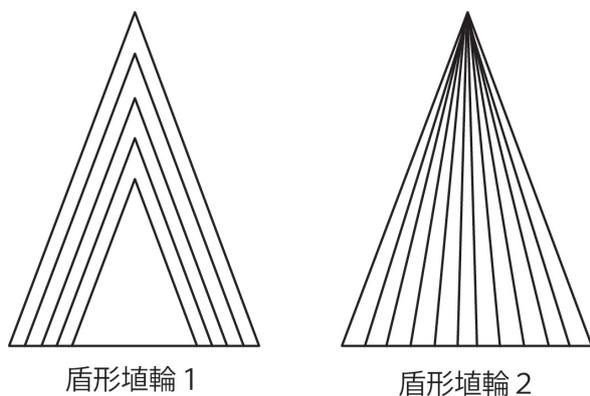


図4 鋸歯文の違い

また、施文の丁寧さでは、盾形埴輪2の鋸歯文を見ると、鋸歯の中を埋める線は、やや不規則に引かれていることからやや荒い印象をうける。綾杉文も一帯のみであることから、簡略化しているととらえることができる。

さらに、製作技法においても盾形埴輪1は、盾側縁部と円筒部の間に残る粘土の状態から、盾面と円筒部は別々に制作した可能性がある。一方、盾形埴輪2の方は、盾側縁部は円筒部に貼り付けるような痕跡が確認できる(写真1)。2つの違いを模式図にあらわした(図5)。

以上から、盾形埴輪1は古く、盾形埴輪2は新しい要素をもつと考えられる。

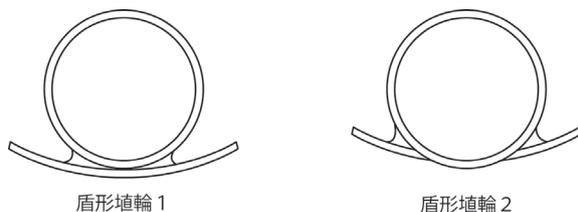


図5 製作技法の違い

4. おわりに

本稿では、墓山古墳出土の2つの盾形埴輪の検討をおこなった。すると、2つの埴輪は、製作技法が異なることがわかった。新古の序列が「丁寧な造りから粗雑になる」と前提すれば、この2つには時期差があるといえる。

古墳に樹立される形象埴輪の時期差が、どのような意味をもつのか、本稿では検討することができず課題として残る。しかし、古墳築造から埋葬までの間、形象埴輪がどのように選択され、古墳へ樹立されたのか、その仕組みを考える要素であることは間違いないだろう。今後も、同一古墳内における埴輪の時期差については、注意深く検討していきたい。

また、墓山古墳は古市古墳群に所在する5世紀代の古墳であり、大王墓群の形象埴輪の様相をうかがい知るうえで、大変重要である。継続して検討をしていきたい。

註

1) A類は佐紀陵山古墳の盾形埴輪に代表されるように、目の字に区画を分割している。外区に直弧文を施し、古段階のものは段差をもつ。実物例は未発見である。B類は矩形線帯対称文と呼ばれる文様構成で、保津・宮古遺跡で実物の木製盾が出土している。B類は、時期が新しくなるにつれ、外区に鋸歯文が加わる(小栗1994)ものがみられる。C類はローマ数字IIのように外区と内区が分割されており、盾の上部隅が弧を描いたように反った形状をしているのが特徴であり、革製盾をモデルとする。

2) 複数の破片が接合して1つの破片となったものについては1点としてカウントしている。

3) 4点の破片は、胎土と焼成などから盾形埴輪2と同一固体と考えられるが接合面が明らかではないため、図化はおこなわなかった。代わりに写真での掲載とした(写真6)。

参考文献(五十音順)

- 青木あかね 2003「古墳出土革盾の構造とその変遷」『古文化談叢』第49集 九州古文化研究会 pp. 53-75
 小栗明彦 1994「山陵町遺跡 SD-02 及び SD-101 出土の埴輪類について」『平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪発掘調査報告』奈良県史跡名勝天然記念物調査文化財協会 pp. 71-293

西谷眞治・鎌木義昌 1959『金藏山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊 倉敷考古館

櫻井久之 1991「長原40号の形象埴輪」『長原遺跡発掘調査報告IV』(財)大阪市文化財協会 pp. 200-210

鈴木一有 2014「野中古墳の築造時期と陪冢論」『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学総合学術博物館叢書10 pp. 57-65

高橋克壽 1988「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第2号 史学研究会

高橋工 1991「盾形埴輪の検討」『長原遺跡発掘調査報告IV』(財)大阪市文化財協会 pp. 183-191

田中秀和 1994「畿内における盾形埴輪の検討—革盾模倣盾形埴輪を中心として—」『大阪市文化財論集』財団法人大阪市文化財協会 pp. 119-145

野上文助 1982『大阪府の埴輪』大阪府立泉北考古資料館友の会 pp. 24

橋本達也 1999「盾の系譜」『国家形成期の考古学—大



写真1 盾形埴輪2の断面



写真2 盾形埴輪1(表)

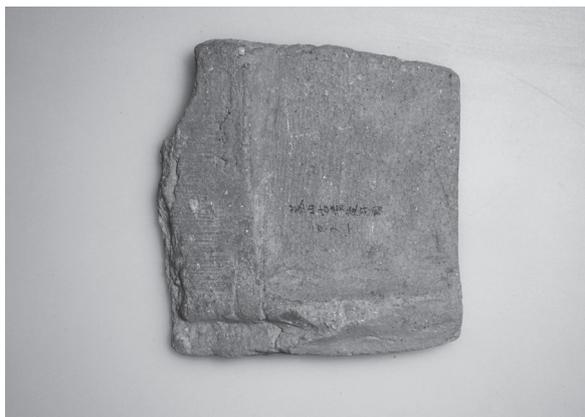


写真3 盾形埴輪1(裏)



写真4 盾形埴輪2(表)



写真5 盾形埴輪2(裏)

阪大学考古学研究室 10 周年記念論集一』 pp. 471-486

羽曳野市 1994 『羽曳野市史』 第 3 卷史料編 1

東方仁史 2003 「器財埴輪からみた昼飯大塚古墳—蓋形埴輪と盾形埴輪を中心として—」『史跡昼飯大塚古墳』大垣市埋蔵文化財調査報告書第 12 集 大垣市教育委員会 pp. 403-412

藤井寺市教育委員会 1997 『西墓山古墳』



写真 6 盾形埴輪 2 (破片)